

音戸の舟唄

「音戸の舟唄」は日本三大船乗り歌の一つと言われている。かつて地元の漁師たちが、本州と倉橋島を隔てる音戸ノ瀬戸を漕ぎながら歌っていた。江戸時代（1603～1867）に歌われたもので、今でも歌い継がれている。この歌の原曲の作曲者は不明である。

音戸の瀬戸沿いに立つ石碑は、音戸の舟唄の歌の重要性を記念して建てられた。

船頭可愛や 音戸の瀬戸で 一丈五尺の 艦がしわる

一丈五尺は、全長約 4.5 メートルの伝統的な単位である。音戸ノ瀬戸は非常に狭く、流れが強く速いため、船乗りが漕ぐのが大変であった。この歌の歌詞は、潮流がいかに強く、船乗りのオール「一条五尺」を曲げるかを説明することで、その難題を表現している。

モーターボートが一般的になるにつれ、この歌は歌われることが少なくなり、徐々に地域の記憶から消えていった。しかし、1960 年に瀬戸市在住の高山訓昌さんが新たに編曲したことで、人気が復活した。現在、地元の小学校では、小学 4 年生の授業で訓昌さんの「音戸の舟唄」が教えられており、町民のほとんどが歌えるようになっている。また、音戸清盛祭でも歌われている。1979 年には呉市の無形文化財に指定されている。